

グロテスク～ Aゴシックすごい

GE Gravenによる



第14章



まるで燃え盛る船団のように、松明の群れはなだらかな黒い丘の上を漂っていた。

ラザロは、その中心にいて、締め付ける鎖の重力の下で苦しんでいた。尾根の頂上まで登り詰めたところで、ラザロは立ち止まった。彼は耳を後ろに倒し、大きく見開かれた瞳孔は針の穴のように小さくなった。

目の前には、遮るもののない土地が広がり、次の高原の頂上には大きな城がそびえ立っていた。堅固な城門の前では、松明の炎が混じり合って渦巻いていた。群衆は城壁を取り囲むように広がり、数百ヤードほどの深さで、手前の人々はまばらになり、粗末な茅葺き屋根の家々の間に散らばっていた。兵士の手がラザロを促し、

なだらかな丘。

「隊列を組め !武器を構えろ !持ち場を守れ !」護衛隊の指揮官が怒鳴った。兵士たちは松明を投げ捨て、ラザルスの周りを駆け回り、緩やかな陣形は整然とした四角形へと詰め込まれた。盾は四角形の縁に向かって掲げられ、槍が突き出し、群衆に堂々と向けられた。「危害を加えるな !隊列が乱れたら、殺せ !」

一見すると威圧的な守備陣が、一斉に前進した。

群衆は嵐のように容赦なく咆哮したが、一行が近づくとつれ、雷鳴は消え、静まり返った夜の空気にはコオロギの鳴き声とパチパチと音を立てる松明だけが残った。やがて、静寂の中で、無数の松明の海が分かれた。まるで死海が波紋のように分かれ、城門へと続く明確な道を照らし出した。ラザロは何百もの見開かれた視線に溺れそうになったのかもしれない。彼は視線を落とし、新しく作られた通路を進んだ。重い鉄の手が彼の一步ごとにカチャカチャと音を立て、準備万端のクロスボウ兵の一団が、一団の行列のために道を切り開いた。

群衆はざわめき、背後から騒ぎ声が上がった。見物人は罵声を浴びせた。その時、頭上から石が飛んできてラザロの頭頂部に命中した。彼は呆然として地面に崩れ落ち、首筋から血が流れ落ちた。クロスボウ兵が石を投げた男に矢を放ち、若い農民は倒れた。この行為は激しい抗議の叫びを引き起こした。二人の兵士が急いでラザロを担ぎ上げた。彼は頭をふらつかせながら二人の間をよろめきながら進んだ。指揮官は皆に警告を叫んだが、叫び声を上げる群衆の声はかき消された。突然、城への道が崩れ落ち、怒りの拳と振り回される松明に完全に飲み込まれた。

ラザロを悪魔の王、悪の君主と確信した群衆は、彼に群がった。女たちは地上での数々の苦しみを語り、彼に唾を吐きかけた。矢が飛び交った。男たちは自らの苦難の道のりを思い出し、彼に襲いかかった。

剣が振り下ろされる音が響き渡り、行き交う無数の足音の下では、興奮した子供たちが石を探し回っていた。槍が流血の中に突き刺さった。

ダルシクール卿の兵士たちは悪魔に飢えた群衆を押し返した。男も女も子供も負傷したり、さらにひどい目に遭ったりしながらも、次々と人が押し寄せてきた。さらに、陣形の中では兵士同士が争い、陣形は崩れ、群衆は彼らを丸ごと飲み込んだ。怒りに燃える腕がラザロを掴み上げ、高く持ち上げ、下から周りへと回した。

呪いと叫び声が響き渡る。鎖でぐるぐる巻きにされたミイラのように、彼は手足を振り上げる荒波に漂っていた。無秩序な叫び声が、大地に響き渡るリズムカルな咆哮へと変わっていった。「悪魔を燃やせ！悪魔を燃やせ！」ラザロは、ますます増していく苦痛に身を任せ、シューシューと音を立て、足をばたつかせながら暴れ回った。「悪魔を燃やせ！」と群衆は叫んだ。

たちまち、響き渡る戦いの角笛が怒りを鎮め、全ての視線が城へと向けられた。

城壁の上から、弓兵たちが一斉に陣取り、矢を群衆に向けて放った。

城門が大きく開き、鎧を着た騎馬隊が轟音を立てて飛び出し、剣と

松明の海の中で盾が輝いていた。群衆は、昼間から逃げ出すネズミのように爆発した。

ラザロは倒れた。意識を失った。広がる混乱の中、死者と負傷者が敷地内に点在していた。ダルシクールの宮廷警備隊がラザロを取り囲み、

外側へ、側面から、盾を構えて。二人の騎士が馬から降り、ラザルスに腹ばいに乗せて担ぎ上げた。一斉に、そして突撃した時と同じように慌ただしく、鎧を着た一団は城壁を駆け抜け、城門は彼らの後ろで轟音を立てて閉まった。

そして城壁の中に入ると、彼らは意識を失ったエルジョを馬から引きずり下ろし、深い中庭の穴に落とした。その奥の壁には、城の地下に開く一枚の鉄板の扉があった。扉の両側には、鎖につながれた二人の囚人が座り、最新の客を不安げにちらちらと見ていた。二人とも身なりはだらしく、無精ひげを生やしていたが、片方は金髪で広い背中と青い目をしており、かなり大きな存在感を放っていた。彼はラザルスよりもさらに大きく、おそらく

巨人のような彼は、小柄な囚人仲間と並んで立っていた。

夜も明けてほとんど明けた頃、ラザロは二人の囚人の会話に気を取られて目を覚ました。彼はじっと横たわり、大柄な男が外国訛りの低い声で嘲笑するのを耳にした。「もしそれがお前のサタンなら、なぜ縛られて穴に投げ込まれるのを許すんだ？答えてみろ！」

小柄な方が答えた。「まあ、サタン本人ではないかもしれないが、確かに悪魔だ。今は捕まったふりをしているだけだ。鎖を解いて、我々全員を殺すだろう！」

「それはあなたのサタンでも悪魔でもない。夜の妖精だと言っただろう、あらゆる特徴を備えている一つ。そしてそれは、あの鎖の中では自力で逃れることはできない。」

ラザロは寝返りを打ち、目をこじ開け、少し苦勞して体を起こした。血で固まった髪を顔から払い除けると、左眉毛のすぐ上にひどい切り傷が現れた。「なんてことだ」と彼はうめいた。

小柄な囚人は、手錠に抵抗しながらどもりながら言った。「ほら！ほら、そうなった！」
「悪魔だ！」彼は、穴の最上端付近を歩き回る警備兵たちに懇願した。「俺たちを助け出してくれ！奴が目覚めるんだ！」

「黙れ！」と兵士が怒鳴り返した。彼はラザロを見て、星空を見上げると、悠然と立ち去った。

「ああ」大柄な囚人は小柄な囚人に文句を言いながら吐き捨てた。「黙れ！お前の叫び声はちっぽけな花にふさわしいぞ。」小柄な男は彼を睨みつけ、鼻を鳴らし、背中を壁に押し付け、膝を上げて腕をだらりと垂らしたまま、硬直した姿勢で座った。おそらく、反抗的でありながらもどこか無頓着な態度で、自分の尊厳を取り戻そうとしていたのだろう。彼は遠くからラザロを睨みつけた。

やがて彼は身を乗り出し、ラザロに向かってシューッと音を立てて言った。「お前が探しているのは私ではない、悪魔よ。私はキリスト教徒だ。」そして大男を指さして言った。「お前が探しているのはこいつだ 北の男

異教徒。

ラザロは弁明した。「私は悪魔ではない。」

「聞こえないのか？」北の男はキリスト教徒の男に怒鳴りつけた。「彼は悪魔ではない。私は彼が何者が言ったはずだ。」

「私の名前はラザロ・ゴグだ。」ラザロは自分の鎖を調べた。

「ゴグ、そうかもしれないな。」北の男は後ろにもたれかかり、ニヤリと笑った。「だが、お前はやはり夜のアルフ、ゴグだ。」

キリスト教徒は彼に尋ねた。「では、もしあなたが悪魔でないのなら、なぜ悪魔のような姿をしているのですか？」

「それが私の生まれつきの姿だ。私は男だ。ただ、他の人とは違うだけだ。」

「男？ただの？」北の男はくすくす笑い、キリスト教徒の方を向いた。「夜のアルフは自分を男と呼んでいる。どう思う？男だと思うか、それとも違うか？」彼は笑った。

ラザロは北の男に尋ねた。「夜のアルフとは何ですか？」

「お前だ！」彼は怒鳴り返した。「もし俺に近づいたら、お前の首を折ってやるぞ。」

ラザロは眉を上げ、相手の方を向いた。キリスト教徒は言った。「彼は北方の人間です。彼の民は、夜の妖精は日没時に森を徘徊する生き物だと信じています。」

「では、彼はキリスト教徒ではないのですか？」とラザロは尋ねた。

北の男は笑った。「アルフは私がキリスト教徒かどうかを知りたがっているんだ。彼は明らかに嫌悪感を露わにして首を横に振った。」

ラザロは彼に尋ねた。「あなたは、イエス・キリストが私たちの罪のために死んだことを信じないのか？」

鎖がぴんと張ってガタガタと音を立て、北の男はラザロを睨みつけながら座った。「違う！」彼は穴の床に唾を吐きかけた。「そんな嘘は絶対に信じない！」

「地獄に落ちるようなことをしないように気をつけなさい」と、そのキリスト教徒は彼に警告した。

北の男は彼を一瞥し、唇を歪めて壁にもたれかかった。「私の

死ねば、私の居場所はオーディンの食卓となるだろう。広間には食べ物、飲み物、歌、そして乙女たちがいる。

ヴァルハラのことだ。お前のくだらない作り話は、小さな子供を怖がらせて臆病者に仕立て上げるために取っておけ。」

「あなたは神話を信じている」とキリスト教徒は答えた。「何度も言っただろう。オーディンも聖なる館も存在しない。周りを見てみる。お前以外にそんな馬鹿げたことを口にする者はいない。」

どうして信じられるの？

北の男は身を乗り出し、キリスト教徒の髪の後ろをつかんで頭をぐいっと引き寄せた。そして顔に唸り声をあげて言った。「言葉遣いに気をつけろ！私の父と兄の土地では、お前たちのような連中が、もっと軽いことを言っただけで殺されるのを見ても見てきた。私はキリスト教徒の中の一人に過ぎないかもしれないが、私の土地では、お前たちは私の民に囲まれることになるだろう。」

この真実を覚えておけ。誰もがお前を「オーディンの冒涇者」と呼び、お前の首を刎ねるだろう

それに対して。」

ラザロは彼らに尋ねた。「なぜあなたたち二人はこんな穴の中にいるのですか？」

北の男は仲間を放し、後ろにもたれかかった。「ここは俺たちの居場所だ、アルフ、なぜなら、私の友人は人を殺してその馬を盗んだからだ。

「私はただ身を守っただけだ」と、そのキリスト教徒は髪の後ろを押さえつけながら言い放った。

「彼が先に私を狙ったんだ。」

「お前が彼の馬を盗んでいなければ、彼はお前に銃を抜かなかっただろう。それなのに、お前は兵士たちを俺が寝ていた場所に導いたんだ。このバカ野郎！俺は歩くのに疲れたと言っただけで、馬を盗めとは言っていないぞ！」

「いや、いや、いや」とキリスト教徒は口走った。「彼らは君を釈放するつもりだったんだ。君がここにいるのは私のせいじゃない。私は君を知らないと言っただけだ！彼は非難するように北の男を指差した。「君が自らここに入ったんだ。君は私を知っていると認めたと、それから話したんだ。」

オーディンについてのあの愚かな考え、真実に縛られているとか、そういう類の考え。あなたを破滅させたのは、その愚かな信仰であって、私ではない！

「そうしよう」と北の男は鎖を振り回しながら答えた。「そして私は誓って敵の手によって誇り高く死ぬのだ。そして明日、我々が絞首刑に処される時、ワルキューレは私を連れて行き、お前を朽ち果てさせるだろう。」

キリスト教徒は彼を叱責し、「我々が絞首刑になったら、お前は偽りの信仰のゆえに地獄で焼かれるだろう」と言った。

「絞首刑か？」ラザロは眉を上げて尋ねた。

「私たちは明日、罪のために絞首刑に処される予定です」と、そのキリスト教徒は告白した。

「お前の罪のために！」北の男は怒鳴った。「ただ、俺は旅に出たのが間違いだったんだ」

「お前のような殺人者で泥棒で嘘つきの蛇と並んで！そして敵の前で私の信仰を守ってくれたこと！それだけだ！」

「しかし、私はダルシクル卿にお会いするためにここに来たのです」とラザラスは主張した。「絞首刑に処されるために来たものではありません。」

「いや、アルフ。お前は絞首刑にはならない。心配するな。」北の男は空をちらりと見上げ、皮肉たっぷりにそう言った。「もうすぐ朝が来る。夜明けには、お前を吊るすものなど何も残っていないだろう。」彼は傲慢な笑い声をあげた。ラザラスは顔を上げた。

かすかな赤い光に縁取られた、薄く繊細な雲を発見する。

「黙れ、異教徒め！」兵士が怒鳴った。ラザロは鎖の中で身をよじり、自由になろうとした。

「あなたは彼を怒らせた。どういう意味だったんだ？」とクリスチャンは尋ねた。

まだ笑いながら、北の男は「友よ、君と賭けをしよう」と答えた。彼はキリスト教徒に近づき、ささやいた。「私は民の言葉を賭けて、

あなたの言葉、あなたの信念と私の信念。あなたはどう思いますか？

「信仰を賭けることはできない。」

「ああ、でも私にはできる。もし私が、我が民の主張が正しいことをあなたに証明できれば、あなたは信仰を捨てて、オーディンの食卓に加わるだろうか？」

「死の直前に冒瀆的な言葉を口にするなど、自分の魂を大切にしていない。」

「私は自分の魂を危険にさらすために賭けるのではなく、あなたの魂を救うために賭けるのです。」

「これは一体どんな賭けですか？」

「我が民の言葉にかけて、オーディンとロキの真実にかけて、私はあなたに誓います、これは

「彼はナイトアルフであって、お前たちの悪魔の一人ではない。」彼はラザルスに頷いた。

「俺は ナイトアルフじゃない 」ラザルスは縛られた体勢から逃れようともがきながら、息を切らして言った。

しかし、北の男は続けた。「まもなく、彼はすべての夜の妖精と同じ運命を辿るだろう。いいかい、彼らは日中は地上に出られないんだ。太陽の光を浴びると燃え尽きてしまうからね。」

そして彼が燃え尽きるのを見たら、私の民の信仰に忠誠を誓うだろうか、そして

オーディンに？

キリスト教徒は眉をひそめ、信じられないといった表情で彼を見た。「正気を失ったのか？」彼はラザロを一瞥し、顎鬚を掻いた。「本気か？」

「あいつが焼け死ぬのは、俺たちが絞首刑になるのと同じくらい確実だ」と北の男はニヤリと笑った。「賭けはするのか、しないのか？」

小柄な方がくすくす笑った。「いやいや、賭けはこうだ。代わりに、お前の魂を救ってやろう。もしお前が言うように、あいつが太陽で燃え尽きたら、俺は自分の魂をお前のオーディンに捧げる。そんなことは絶対に起こらないがな。」彼は笑いながら、大柄な友人を指で突いた。「もしあいつが燃え尽きなかったら、お前は主キリストを救い主として受け入れ、オーディン神と民の信仰を捨てるんだ。そして、俺たちが死んだら、天国で永遠に俺に感謝するんだ。」

北の男は顔をしかめた後、大声で笑い出した。「その意気だ！」彼は仲間の肩を軽く叩いた。「じゃあ賭けだ！よし！」

「わかった」とキリスト教徒は嘲笑った。「そして、その言葉は必ず守らせるぞ」。二人は壁にもたれかかり、ラザロが必死に腕を解放しようとする様子を見守った。エルヨは立ち上がり、壁を滑り上がった。彼は振り返り、キリスト教徒に忠告した。「私の命を賭けて自分の魂を賭けてはならない」。空を見上げ、再び鎖の方を向いた。

キリスト教徒はゆっくりと立ち上がった。「負ける可能性があるなら、それはただの賭けだ。全能の神を守る以上、私は負けるはずがない。それに、お前のような者からまた一人の魂を救ったのだから、今回は神の勝ちだ。」キリスト教徒はニヤリと笑った。

「もうこれ以上、策略は通用しないぞ、アルフよ。」北の男はラザロを嘲り、ウインクした。「太陽が昇れば、彼はオーディンのものとなる。そしてお前は灰と塵となるのだ。」

兵士たちが塹壕の尾根を包囲すると、鎧のガタガタという音が轟音へと変わり、彼らはクロスボウを構えていつでも攻撃できる状態になった。

「全員伏せろ！」兵士が叫んだ。「今すぐ伏せろ！」ラザロとキリスト教徒は穴の床に飛び降りた。北の男は顔をしかめ、背中を壁にしっかりと押し付けた。兵士は「捕虜全員確保！」と大声で叫んだ。

ガチャン !ギシッ !鉄製の坑道の扉が大きく開き、武装した警備兵たちがどっと流れ出した。彼らのほとんどはキリスト教徒と異教徒の囚人たちを壁に押し付け、残りの者たちはラザロに群がった。

「立て !急げ !」彼らはラザロを鉄の扉へと急いで押し込んだ。彼は鎧と剣の渦の中をよろめきながら進み、松明、槍兵、弓兵が並ぶ地下通路を駆け下りた。彼の後ろで落とし穴の扉が閉まり、廊下に声が響き渡った。「落とし穴の扉、安全 !」衛兵たちはラザロを曲がりくねった地下迷路へと連れて行った。

護衛の一人が「生まれ !」と叫んだ。兵士たちは彼をドアの方へ振り向かせ、鎖をしっかりと握りしめた。「中に入れ」。ラザロはそれに従った。彼の後ろでドアがカチッと閉まり、兵士たちが去っていくと、つぶやき声と金属が動く音が遠ざかっていった。

空気は重く、地下室のように冷たく、古い蠟と湿った石が腐敗したような、かすかに甘い香りが漂っていた。彼は薄暗い長方形の部屋を見渡した。部屋の中央には、床から長辺に沿って長い粗削りのテーブルが置かれ、その両側には同じ長さのベンチが二つ並んでいた。テーブルの両端には、皿に立てられた二本のろうそくが燃えていた。手前のろうそくは高く燃え上がり、その根元に揺らめく光の輪を描いていた。奥のろうそくは光を放っていなかったが、芯からかすかな赤い光が漏れていた。渦巻く煙の下、床の奥の隅には、粗末な藁のマットレスが敷かれていた。反対側の隅には、平べったいネズミらしきものが、ほとんど朽ち果てて横たわっているのが一瞬見えた。ラザロは壁にもたれかかり、鎖を石にこすりつけた。彼はマットレスの上に倒れ込み、今の窮屈な状況の細部を夢の無限の領域へと委ねた。

～*～

しかし、ほんの一瞬のここのように思えたが、彼の夢は消え去り、扉は大きく開いた。そして彼の目も開いた。彼は突然転がり、まっすぐに座り直し、戸口から差し込むまばゆい光に目を細めた。二人の召使いが七段の燭台を持って入ってきて、テーブルの上に置いた。彼らが使い終わったろうそくを持って出て行くと、兵士の一団が中に入り、奥の壁に沿って並んだ。数人の身なりの良い男たちが入ってきて、続いて、かなり大柄で繊細な中年の禿げた司教が、正装で入ってきた。彼はラザロと視線を交わしたが、その落ち着いた目には警戒心、あるいはためらいさえも物語っていたのかもしれない。彼の後ろで、衛兵たちが扉を閉め、持ち場について警備を始めた。

書記は食卓の前で立ち止まり、ラザロをじっと見つめた後、司教の方を向いた。

「まさに悪魔だ。見てみる、あの歯、あの耳、それにコウモリの翼まで。」

「私は悪魔ではない」とラザロは反論した。

司教は書記官を訂正した。「正当な理由もなく彼を非難してはならない。彼は我々に何の害も及ぼしていない。いずれ真相が明らかになるだろう。」

ラザロが兵士たちの緊張した顔を見渡すと、書記、司教、その他数人が部屋の中をゆっくりと動き回った。隊列が変わるたびに金属がカチャカチャと音を立て、部屋には新鮮な汗、使い終わろうそくの脂、燃え尽きた芯の甘い香りが漂っていた。書記はため息をつき、インク壺、羽根ペン、羊皮紙の巻物を持ってテーブルに着席した。ラザロは立ち上がった。ラザロが壁際に立つと、不安げな衛兵たちが武器を握りしめた。書記は紙を広げ、羽根ペンをよし、それを投げ上げて紙の上に置いた。彼はラザルスを鋭く睨みつけ、深く息を吸い込んだ。

「お名前はありますか？」と書記は彼に尋ねた。

「ラザロ。ラザロ・ゴグ。」羽根ペンが走り書きした。

「ラザロ・ゴグよ、あなたが今告白することは真実として記録される。あなたは今、神と聖なる御前で真実のみを告白することを誓いますか。」

「私は真実を語る。」

「よろしい。では、あなたは誰に仕えているのですか？どの主君、どの王に仕えているのですか？」

彼は書記官に答えた。「私は主なる神であり王である方に仕えています。疑わしげな視線が辺りをさまよった。

「もしかしたら、別の言い方をさせていただくかもしれません」と書記は述べた。「あなたは誰に忠誠を誓うのですか？どの貴族、どの国に？」

「私は神の人です。神、聖下、そして教会に忠誠を誓います。」

司教は微笑んで前に進み出て言った。「よろしい。では、あなたは父であり、子であり、聖霊である唯一の全能の神を信じますか？」

"私はします。"

書記は筆記を止め、眉を上げて顔を上げた。「つまり、あなたは自分を人間だと考えているのか？しかも、神の子だとも思っているのか？」

"私はします。"

「人間には翼はない」と彼は皮肉を込めた口調で答えた。「だが、教えてくれ、君は本当に飛べるのか？」

"はい。"

書記は書きながら再び彼に尋ねた。「あなたは一度にどれくらい遠くまで飛べるのですか？」

ラザロは答えた。「半晩あれば休めます。」しかし、羽根ペンは凍りつき、書記は疑わしげな目で唇をすぼめて後ろにもたれかかった。数人の目を見開いた衛兵がぶつぶつとつぶやいた。

「静かにしなさい。」司教は彼らをたしなめた。そしてラザロの方を向いた。「ラザロよ、あなたは処女から生まれ、苦しみを受け、復活し、天に昇られたキリストを信じますか？」

"私はします。"

「よし。」司祭はうなずきながら部屋の中を歩き回った。「これは良いことだ。」

書記は尋ねた。「あなたの両親について教えてください。彼らはどんな人で、今はどこにいるのですか？」

ラザロはそわそわしながら、不安げな視線を司教に向けた。司教は書記官の方を向き、手招きしながら言った。「これ以上長々と話すのはやめよう。もっと重要な質問をしよう。」

「わかりました。」書記は目を丸くして、次の質問を続けた。「あなたは人を殺したことがありますか？あるいは戦闘に参加したことがありますか？」

"いいえ。"

彼は羽根ペンを水に浸し、振ってからラザロをじっと見つめた。「人を殺したことがない？なのに犬のような歯を持っている。教えてくれ、お前は肉を食べるのか？」

「ええ、そうです。つまり…」

書記官は彼の言葉を遮った。「あなたは一度も人を殺したことがないと言うのですか？彼は不安と困惑を装いながらラザロを問い詰めた。「しかし、肉を食べるには殺さなければならないでしょう？」そして、さりげない非難を込めて、彼は羽根ペンをエルジョに向けた。「もしかして、あなたは今、この評議会の前で嘘をついているのですか？」

「賛成だ、賛成だ。」司教は優しく手を振り、書記を制止した。「混乱する必要はない。彼に話させなさい。」

ラザロは告白した。「私は野獣を殺しましたが、神の戒めは適用されません。」

動物たちに！お腹が空いていたのにパンがなかったんだ！」

書記は眉を上げた。「いや、パンですか？」

「全くありません。森の中で穀物は見つかりませんでした。穀物がなければパンは作れません。」

「では、あなたはパンを食べるのが好きなんですか？」と書記は書き記した。

"いいえ、私はパンが好きではありません。"

書記は立ち止まり、ため息をついた。「では、パンが好きではないのに、なぜ神の御名においてパンを作ろうとしたのですか？」

司教は咳払いをして、大きな腹の下で指を組んで彼に近づいた。「あなたは、キリスト教の司祭が行うミサにおいて、パンとワインが神の力によってキリストの体と血に変わると信じますか？」

"私はします。"

「素晴らしい返答だ。」ニヤリと笑う司教は両手をこすり合わせ、書記は微動だにせず座っていた。「彼の答えを記録したのですか？」

書記は答えた。「しかし、もしよろしければ、彼に尋ねたいのですが…」

「それは私を喜ばせるものではない」と司教はテーブルに深く寄りかかり、彼を叱責した。「

「彼の答えを記録しなさい。」彼は指を鳴らし、羊皮紙を指差した。

「お望み通りに。」書記は不機嫌そうだったが、羽根ペンを差し出し、従った。司教は満足そうな顔でラザロの方を振り返った。

書記はどもりながら、明らかに不安そうな様子で次の質問をした。「それで、あなた方のような ええと 空を飛ぶ人たちは、他に何人いるのですか？」

「ああ、そうですね」と、感じの良い司教は口を挟んだ。「確かに、もっと多くの空飛ぶ男がいるはずですよ。」

「あと何人いるんだろう？そして、彼らは今どこにいるんだろう？」彼は期待に胸を膨らませ、唇をすぼめた。

「分かりません。私は一人です。」

「あなた方は一人しかいないのですか？」

「私は他に誰も見たことがない。」

「なるほど。」司祭は眉をひそめ、大きな顎を撫でながら、失望感を床に投げ捨てた。

羊皮紙から、書記は別の質問を声に出して読み上げた。「

刃物、弓、またはあらゆる種類の武器？」

「かつて私は骨でナイフを作ったことがある。皮や肉を切るためだった」とラザルスは語った。

司教はラザロに近づき、彼の目をじっと見つめた。ラザロの祈りの十字架を見つけると、それをよく見るために覆いかぶさっていた鎖を脇にどけた。「これはどこで手に入れたんだ？」司教はさらに身を乗り出し、自己陶酔的な太った男によくあるように、荒い息を吐きながら、じっくりと観察を続けた。

「それは私からの贈り物だった 修道士からの贈り物だった 彼の祈りの十字架だった。」

肥満体の司祭は、青白く華奢なソーセージのような指でそれを転がし、擦り切れた角を調べた。「ああ。こんな風に祈りの十字架をすり減らすのは修道士だけだ。ラザロ、君の言うことを信じるよ。」

司教は彼にさりげなくウィンクし、衛兵の方を向いて言った。「もう十分だ。奴らを退け。」

書記は立ち上がり、羽根ペンをインク壺に突き刺した。「おそらく、私たちは急いで行動すべきではないでしょう。」

彼が牢獄にいる間に囚人から盗んだのではないと、どうして断言できるのですか？

「ああ、彼がそんなことをしたはずがないと確信している」と司教は答えた。彼はラザロの胸に首輪をしっかりと固定している鎖の層を引っ張った。「十字架がこれらの鎖の下にあるということは、彼が縛られる前からそれを身につけていたということだ。悪魔は決して十字架を身につけない。」司祭はそれからラザロを指さしながら部屋全体に語りかけた。「これは悪魔の子ではない。これは空を飛ぶ人間だ。空を飛ぶキリスト教徒だ。」

その男はラザロという。そしてこの州の司教として、私はこの件に関して、彼に対してこれに反するいかなる言及も聞き入れない。」

テーブルを回りながら、書記は司教にささやいた。「少しお話してもよろしいでしょうか？」部屋の遠くの空いている隅を指さしてうなずいた。ラザロは耳をそばだてた。人目のつかないように、書記は司教にささやきながら懸念を伝えた。「どんな悪魔でも、これらの質問のどれにも答えられるでしょう。それに、これは神の恩寵や神の光によって作られたものとは思えません。おそらく、それらをそのままにしておくのが賢明でしょう。」司祭は彼の言葉を遮った。「よく考えてみたらどうだ？この繊細な瞬間を乱せば、ダルシクール卿はお前たちにその鉄枷をはめるだろう。彼はくると振り返り、兵士たちに向かって怒鳴った。「聞こえなかったのか？その汚い鉄枷をすぐに外せ！」三人の衛兵が飛び出してきて、ラザロの服を脱がせた。

書記は鼻を鳴らし、持ち物をまとめながらラザロに話しかけられた。「私は空を飛ぶ人間だ。」

書記は凍りつき、司教に視線を向けたが、鋭い視線が彼を見つめ返していた。彼は視線をラザロに戻し、無理やり笑顔を作って答えた。「ええ、あなたがそれです。」満足そうな司祭をちらりと見てから、巻いた羊皮紙とインク壺を持って部屋を出て行った。

ラザロは司祭に軽く頭を下げ、「あなたには恩があります。ありがとうございます。」と言った。

「ええ、そうです。そして、その件については後で、私のプライベートな空間で話し合ってみましょうか。」

「宿舎だ」と、ラザロの腕を撫でながら、彼は小声で冗談めかして言った。彼の笑みは険しい眉と高い顎に変わった。「だが、まだ自由ではない。ダルシクール卿がまもなくお目にかかれるだろう。」司教はくると振り返り、兵士たちに話しかけた。「我々はここで終わった。」

部屋から人がいなくなり、ドアが開まると、ラザロはベンチに腰を下ろした。全身泥まみれで、髪は血でべったりと固まり、彼は二つの明るく燃える燭台の下で、切り傷や痣の手当てをしていた。

しばらくしてドアが再び開き、中年のメイドと3人の若い女中が姿を現した。肥満体のその女性はラザロとほぼ同じくらいの身長で、その巨体ゆえに、控えめな存在感はほとんど完全に覆い隠されてしまうほどだった。

彼女の後ろに続々と入ってきた乙女たちを前に、彼女は胸の下に石鹸や軟膏、その他様々な衛生用品がぎっしり詰まった大きな盆を抱えていた。彼女は立ち止まり、テーブルの端のベンチに座っているラザロをじっと見つめた。

ラザロは立ち上がり、ひれ伏した。

「それで、あなたがあの有名な空飛ぶ男さんのね？」と彼女は尋ねた。「ラザルスさんだったかしら？」

「私はラザルス・ゴグです」と彼は名乗った。

「もっと元気なネズミを見たことがあるわ。あんたはひどい臭いよ」と彼女は鼻を鳴らし、テーブルの端まで歩いて行った。「それに、ここからでも臭いがするわ」。トレイの中身を降ろしている間、彼女は女中たちがまだ動いておらず、部屋の向こう側から彼をじっと見つめていることに気づいた。女中のうちの一人は湯気の立つ水の入った桶を握りしめ、もう一人は折りたたまれた布の束を抱きしめ、最後の一人は新しい服とブーツを持っていた。

「さあ、こっちへ来なさい」と彼女は彼らを叱りつけた。「ラザロ様は嘔みつきませんよ。彼はキリスト教徒ですから。」
彼らは飛び出してきて、彼を見つめながらテーブルに中身を置いた。彼は微笑んでうなずき、彼らも微笑み返した。

彼女はテーブルに戻り、軟膏を混ぜるのに忙しくした。「ラザロ様、旦那様はあなたに危害を加えるつもりはなく、あなたの虐待に激怒されています。それ以来、旦那様は多くの人を逮捕しました。」
村人である我々は一切関与していないことを断言できます。城門に集まっていた者たちは州の他の地域から来た者たちです。彼らは、閣下の軍隊が領地を支配するにはあまりにも小規模であることを知って、大胆になっているのです。

「しかし、ダルシクール卿はまだ私とお話したいとおっしゃっているのですね？」とラザルスは尋ねた。
「確かに。では、どうぞこの場から降りていただけますか。」
「そして彼は私の居場所を知っているのか？」ラザロはテーブルを回りながら尋ねた。
「そうです。ラザロ様、あなたが閉じ込められているのは、あなたの安全のためです。彼はあなたに
「彼を賓客として扱います。」彼女は彼の腕をつかみ、自分の真後ろに立たせた。「ここに立って。」彼女はテーブルから石鹸のバケツを引っ張り、彼の足元にドスンと置いた。

「今、彼と話せますか？」
彼女は彼をじろじろと見て、くすくす笑った。「あなたはひどく汚れていますね。とても殿下に謁見できるような状態ではありません。お風呂に入らなければなりません。さあ、始めましょう。その上着を脱ぎなさい。」女中たちが天使のように軽やかに彼を取り囲むと、女中たちは再び盆の方を向いた。それぞれがバケツから石鹸のついた布を取り出し、絞った。

ラザロは目を見開いた。彼は彼らから一歩後ずさった。「服を脱げ？この瞬間に？」
「閣下にお会いになりたいのですね？」彼女は肩越しに彼に尋ねた。
「ええ、でも私はむしろ」
「もう、静かにして。私は5人の息子を育てて、一人一人にこう言ったのよ。『あなたたちが持っているものは、私が今まで見てきたものばかりよ』って。さあ、服を脱いで、旦那様のために綺麗にしてあげましょう。命令を受けているのよ。その汚れた皮を脱ぐか、私が脱がせてあげるか、どちらかよ。」彼女は開けてあった軟膏の瓶を再び封をして、トレイに戻した。「旦那様はあなたが綺麗に洗われることを期待しているの。それに、旦那様が新しい服とブーツを用意してくださったから、その皮はもう必要ないわ。さあ、見てごらん」

彼女の後ろで、女中が息を呑んだ。別の女中がくすくす笑い、女は彼女たちを叱った。「そんな振る舞いは許さないわ！」彼女はよろめきながら彼女たちの方を向き、説教を続けた。「私が」

しかし、彼女はひどく恥ずかしそうに立っているラザロを見つけた。

「まあ！彼女は頬に手を当てて声を詰まらせた。ラザロの並外れた容姿に、皆の視線が釘付けになった。

彼女は咳払いをして侍女たちに怒鳴りつけた。「さあ、早くやりなさい！」侍女たちは駆け寄って石鹸のついた布を彼に当て、ゴシゴシと洗った。女は彼の髪を洗い、それから軟膏の入った缶を持ってきて、布で彼の額の傷を拭いた。そして、その傷の手当てをした。侍女たちが体を洗っている間、彼女もまた彼の頭の小さな傷の手当てをした。

「これで大丈夫よ。」彼女は軟膏をテーブルに置き、清潔な布巾を持って振り返った。「深い傷は傷跡が残るけれど、あなたは生き延びるわ。」

女性は彼の頭を後ろに支え、首筋を洗った。「ラザロ様、髭を剃る必要は全くありませんよ。頭以外には毛が生えたことがないのですか？」

"いいえ。"

「空を飛ぶ人間は皆、君のように耳や歯が長いのか？」

「わからない。他に見たことがないから 痛っ！」ラザロは身構えた。

「ああ、じっとしてて。君を傷つけたりはしないよ。」

「奴らのせいだ」と彼は認め、天井に向かってぶつぶつと呟いた。

彼女は、おそらくいたずらを企んでいるであろう3つの頭のとっぺんを見下ろした。「リリタ！あなたたち、まだ終わってないの？」

3人は満面の笑みを浮かべて立ち上がった。「ああ、そうだよ、お母さん。」

「では、バケツを動かして、彼の背中を洗ってください。」女性は彼の頭から手を離し、肩を洗った。「腕を上げてください。それから、ラザロ様、もしよろしければ、その翼を広げていただければ、翼の中もきれいにできます。」彼はそれに従った。人々は息を呑んだが、入浴は続いた。

やがて、女性は彼の体を乾かし、粉をはたいた。彼女は背中が真ん中で切り裂かれた白いフリルのシャツを掲げた。「あなたの翼のためのスペースは確保しておきました。でも、それを着るのは…」

「ちょっと大変だったわ。」しかし、それは彼の翼にすっと収まり、完璧に形を整えた。「素晴らしいわ。少し小さめに仕立ててしまったの。あなたに合うように、長男のサイズを参考にしたのよ。彼も大柄な人だったわ。」彼女は前を留めた。

「これが彼のシャツなのか？」とラザロは尋ねた。

「あら、まさか彼女にくすくす笑った。「彼はこんなに素敵な服を着たことなんて一度もなかったわ」彼女は彼の襟を整えた。「でも、彼はもう死んでしまったのよ」

「彼に何があったの？」

彼女は唇をすぼめた。「彼はあの怪物、ヒューゴン卿 悪魔そのものに殺されたのよ。」

彼女は侍女の一人から黒いズボンを一枚取り、彼に渡した。「彼の軍隊は村の畑を襲撃し、夫と5人の息子、そして2人の娘を殺しました。彼らは勇敢に戦いましたが、ユゴンの軍には到底敵いませんでした。」

「なぜ彼は彼らを殺したのか？」

「だって彼は怪物なんだもの。でも、もういいわ。終わったことは終わったことよ。」彼女は彼に黒いブーツを一度渡した。「さあ、これを履きなさい。」彼女はテーブルの方を向き、彼女と侍女たちはそれぞれの持ち物を片付けた。

彼女はラザロに背を向けて言った。「ええ、私たちはあなたを石鹸と水で洗い、血を洗い流し、軟膏を塗りました。私たちにできるのはそれだけです。」

盆に料理を補充しながら、彼女は侍女の一人に「それから、あの皮を持ってきて」と指示した。

「うん、お母さん。」

彼女は太った女性特有の息を大きく吸い込み、彼に呼びかけた。「いいえ、ラザロ様、あなたは空を飛ぶ人ではありません。」

「そうだ」とラザロは言い張った。

彼女は振り返り、彼の瞳を見つめた。それから両手を腰に当て、感嘆の笑みを浮かべた。「いいえ。今のあなたはまるで空飛ぶ王子様のように素敵です。そして、私と同じように、殿下もきっとあなたに心を奪われるでしょう。」ラザロは頭を下げ、微笑んだ。

「さあ、みんな、荷物をまとめましょう。私たちの仕事は終わりました。」女性はトレイを持ってドアまで行き、軽くノックした。

ラザロは彼女の後ろから声をかけた。「あなたには感謝します。ありがとう。」

「いいえ、違います、ラザロ様。息子たちの母親として過ごしたのは、もう二シーズンも前のことです。このような瞬間を心から味わえるのは、未亡人の母親だけでしょう。」彼女は弱々しく微笑み、床を見つめた。過ぎ去った季節を垣間見ようとしてもしたのだろうか。しかし、扉が開き、衛兵が彼らを通した。「さようなら、ラザロ様。」彼女はそう言い残し、三人の重荷を背負った女中が彼女の後ろをついて行った。

「うん、ママ」とラザラスは答えた。ドアがカチッと閉まる音も聞こえたが、彼はまだ笑顔で、小さな男の子のように手を振っていた。

やがてラザロは頭を下げ、両手を後ろで組んでテーブルの周りを歩き回り、思索にふける翼を持つ貴族の姿。そして彼は何度も壁越しに警戒の眼差しを向け、耳をびくびくと動かした。おそらく無意識のうちに、地獄の到来を告げるあの独特の音 時には無数のイナゴの羽音のように聞こえる音 を確かめようとしていたのだろう。

ごく短い滞在期間中に、彼はすぐに壁を嫌いになり、代わりに開けた空間、つまり永遠の空という別の安全な場所を切望するようになった。そして、主の庇護下にあったにもかかわらず、

高貴な客人であるラザロは、さらに高位の支配者の囚われの身であった。彼はろうそくの光の中で深く物思いにふけり、部屋を出る危険を冒すことはできないと十分に理解していた。なぜなら、今や地上は昼の光に支配され、灼熱の太陽が彼の主たる門番として君臨していたからである。

しかし、その間、天界の地獄の戦車から逃れたとはいえ、もっと差し迫った懸念が彼を悩ませていた。まず第一に、ダルシクール卿、あるいは敬虔なキリスト教徒に、自分が完全に夜のために創造された存在でありながら、神の光の中で創造されたキリスト教徒としてのイメージを保っていることをどう説明すればよいのだろうか？また、ダルシクール卿がどんな任務を彼に与えるにせよ、それが罪深い行為ではなく、昼間の光を必要とするものでないことを祈るしかなかった。もしそれがそれほど単純な任務であれば、完了したら、彼は再びカンチェッロへ向かい、サルヴィティエーノ修道士を迎えに行き、ゲートストーンの開鎖を手伝うという約束を果たすかもしれない。

しかし、長い間空っぽだった腹は、まるで空っぽの墓のように、空腹の痛みにもめき声をあげた。彼はドアの方を向き、鼻で空気を探った。最初はかすかだった匂いは次第に強くなり、焼き豚の香りだと確信した。外の廊下から声が響いた。ドアが勢いよく開いた。

湯気の立つ料理を抱えた召使たちが列をなして入ってきた。ラザロは壁際に背を向け、彼らが食卓に集まり、銀の皿で王様のための宴会料理を並べるのを見守った。ローストポーク、胡椒を効かせた孔雀、魚の切り身、柔らかい仔牛肉、グリルした牛肉、焼き鶏肉、鹿肉のステーキなどが、混み合った食卓の上で場所を奪い合っていた。ゆで卵とブロックチーズが皿を彩り、ナッツが山盛りのボウルの横にはフルーツがトレイに並べられていた。ワインのピッチャーはふっくらと膨らんでいた。テーブル全体が、まるで広大なコラージュと料理の傑作へと変貌を遂げた。

召使たちは一人ずつラザロに頭を下げて微笑み、部屋を出て行った。最後に、痩せた老召使いが一人分の食器を並べた。彼はゴブレットを持ち上げ、ワインを注いだ。

「宴会があるのですか？」とラザロは尋ねた。

「はい、どうぞ、ラザロ様。他に何かご用でしょうか？」彼はとても陽気そうだった。彼は差し出すように手をテーブル全体に渡した。「すべてお気に召しましたでしょうか？」

「いや、違う。」ラザロは首を振り、眉をひそめ、宴会を隅々まで見渡した。その贅沢さに圧倒された。「多すぎる。死んでしまう。全部食べなければならぬのか？」

「いえいえ、そんなことはありません」と召使いはくすくす笑いながら言った。「ラザロ様、お好きなものを召し上がってください。お気に召しましたら、お席をご用意してお待ちしております。」彼は皿とゴブレットを指さしたが、まるで溺れているかのようだった。

周囲の料理によって。

ラザロは自分の持ち場に近づき、不平を言いながら言った。「しかし、こんなにたくさんあります。多くの人が食べるのに十分な量です。腐らせてしまうといけませんので、他の人にも食べさせてあげてください。」

「ああ、腐ることはありませんよ、ラザロ様。」召使いはにやりと笑った。彼はテーブルを見渡した。

「明日はあなた様のおかげで、皆で盛大な宴を開きましょう。殿下もご機嫌で、お祝いムードです。そして、あなた様がお腹いっぱいになったら、残りは城の使用人全員に振る舞われることになっています。」

「彼は何を祝っているのか？」

「彼はあなたを称えています、ラザロ師よ。」

「私？ なぜ？」

「ええ、たとえ彼の理由を推測できたとしても、そのような事柄について私が議論することは許されていません。ラザロ様、他に何かご用でしょうか？」

「いえ、結構です。ありがとうございます」と彼はつぶやいた。笑顔の召使いは立ち去り、ラザロは皿の上で祈りを捧げた。

そして、祈りの十字架にキスをした後、ラザロはたちまちテーブルに駆け寄り、あらゆる肉料理を皿に盛り付けた。彼は一皿一皿を味わった。修道院での生活の中で、これほど素晴らしい宴会にあずかるなど、想像もしていなかった。食事をしながら、彼の心は別のところであり、少年時代のカタコンベでの日々、何度も何度も、父が戸口で見張りをしている間、彼は食堂の厨房からこっそり持ち出したわずかな肉やチーズの切れ端と一緒に、カリカリのパンをボウル一杯食べていた。王や領主、城、そして空想的な宴について書かれた写字室の多くの本を密かに読んでいた。ベッドからこっそり抜け出してワインセラーに忍び込み、上機嫌な太った修道士を捕まえようとしたこともあった。ラザロにとって、それらはすべてほんの数日前の出来事のように思えた。そして、表面的にはほろ苦い意味で、オディーノの陽気な精神が自分の周りに漂っているように感じられた。

その時になって初めて、彼は自分の皿の横に置かれた、ワインがたっぷり入ったゴブレットの中に、その酒の源を見つけた。

聞き慣れた、しかし古めかしい言葉で彼を招いた。「もう水は飲まず、少しワインを飲みなさい。胃の具合と、度々起こる病弱さのせいだ。」オディーノの朗らかな笑い声が彼の心にこだました。彼は杯を取り、一口飲んで、唇を鳴らした。それからゆっくりと笑みが顔に浮かんだ。彼はゴブレットをひっくり返し、一気に飲み干し、ため息をついた。それから天井を見上げ、オディーノの霊に語りかけた。「匂いより味はいい。」彼はもう一杯注ぎ、孔雀の脚を一本ちぎった。

宴が続くにつれ、ラザロは水差しを軽く叩き、肉を一口食べるごとにワインで流し込み、時間が経つにつれてますます上機嫌になっていった。

やがて彼は何もないところでくすくす笑い、自分自身と食べ物との間で率直な対話を始めた。

ラザロは酔っていた。

「地下室にいた間、なぜあんなに笑っていたのか、今ようやく分かりました。」歯を見せてニヤリと笑い、彼は天井に向かって乾杯した。「天国にいるオディーノ修道士に乾杯。こう書いてある。誰も、古いものを飲んだ後、すぐに新しいものを欲しがらる。なぜなら、「古いもののほうが良い」と言うからだ。彼は注ぎ足した。彼はゴブレットを手に持ち、残りの孔雀の脚を持ち上げると、ベンチから床に転げ落ちた。ワインがシャツに飛び散り、紫色に染まり、ゴブレットは部屋の隅まで転がっていった。彼はまだ大きなドラムスティックを握ったまま、横向きに転がり、酔っぱらってくすくす笑った。

ラザロは自分の杯を探し、隅っこで、平たく腐りかけたネズミの死骸らしきもののそばにそれを見つけた。彼はネズミに話しかけた。「元気がないようだな、友よ。クロディウス修道士に踏まれたのか？」彼はにやりと笑って鼻を鳴らし、片腕でぎこちなく体を支えた。「ネズミ様、私が空を飛ぶ人間だをご存知でしたか？」ラザラスは返事を期待しているかのように、だるそうに耳をひそめた。「では、空を飛ぶ人間には話しかけないのですか？」沈黙が流れた。「では、これを一口食べてください」彼はネズミの方にドラムスティックをしっかりと向けた。「何か食べてほしいのです。少し痩せているようですから。」彼は笑いながら、意味不明なことを口走った。

なんとか体勢を立て直したラザロは立ち上がろうとしたが、また倒れた。彼はろれつが回らない口調で言った。「ええと、ネズミ様、どうしても知りたいなら、私は人間で、飛んで、ええと、飛んでいるんです…」彼はうめきながら立ち上がろうとした。「立てない…」ようやくテーブルにつかまって体を支え、ぼんやりと壁を見回した。「私は…人間で、飛んだのか？人間で、飛んだのか…なんてこった。」

ようやく彼は体勢を立て直し、テーブルの長い辺をよるめきながら下りていき、酔っぱらってふらつきながらテーブルに寄りかかった。彼は目を細め、困惑した表情で周囲を見回し、自分が今どこにいるのかわからずにいるようだった。彼の視線は遠くの壁に止まった。ひどく酔っていたため、石が呼吸しているように見えた。膨らんだり縮んだりしているように見えたのだ。彼はドラムスティックを持ち上げ、壁にぶつけた。「もしかしたら、こいつも生き返らせてくれるかな？」彼はまっすぐに立ち上がり、壁を叱責した。「お前を呼んだ覚えはないぞ。」彼は壁が静止していること、呼吸したり膨らんだりしているのは酔っぱらった自分だけだと分かっていたが、一度頭に浮かんだその即興の侮辱の誘惑に抗うことができなかった。彼は鼻を鳴らし、床に倒れ込み、虚空を見つめた。

突然、聞き覚えのある音が大きくなり、ラザロはびくっとした。それはまるで

近づいてくるイナゴの大群のようだった。彼はテーブルの下に這い込み、遠くの壁の土台に目を凝らした。騒音が突然止んだにもかかわらず、壁は変わらなかった。テーブルの下の影の中で、彼は反対側の壁に頭を向け、一對の裸足には、黒い鉤爪のような爪が生えていた。長く湾曲した爪の鋭い先端は、石の床に均等に広がっていた。

「なんてことだ！」彼は恐怖に震えながら、息を呑んで呟いた。

「ええ、愛しい空飛ぶ人よ」と多くの女性の柔らかな声が同時に聞こえた。「私はあなたの愛しい神です。」足はテーブルの周りを歩き、ベンチの下に陣取り、彼が手を伸ばして触れることができるほど近くに立った。「さて、ラザロ様、私はあなたをどうしたらいいのでしょうか？あなたは正しく死ぬ方法を知らないようですね。」

「そんなに理解しにくいことなのか？私一人で教えなければならないほどなのか？」ラザロ黙ったまま、テーブルの周囲を無秩序に歩き回る足音を追っていた。足音は時折止まり、また動き出す。

「あなたの宴は死に満ちた祭壇だ。彼らに何をしたか見てみる。首を切り落とされ、足を切り落とされ、内臓を抜き取られ、バラバラにされ、焼かれ、煮られ、引き裂かれた。ラザロ様、彼らの叫び声が聞こえるか？」

突然吐き気に襲われたラザロは、お腹を押さえたが、お腹が何度も上下していることに気づいた。

「お前が食べたんだ。奴らの苦しみが見えるか？」激しい痙攣に襲われ、彼は横になった。彼は横向きになり、今にも裂けそうな腹を抱えていた。その時、彼はそれを聞いた。胃の中から聞こえてくる、まるで多くの死にゆくネズミの悲鳴が混ざり合ったような、微かな叫び声だった。

「ラザロ師よ、彼らが叫ぶ理由をご存知ですか？」

ラザロは最後に足跡があった場所を振り返ったが、そこにはもう足跡はなかった。彼は仰向けになると、ルシファエルの顔が自分の顔の上に浮かび、黒い瞳が燃えるように迫っているのが見えた。彼は恐怖で身がすくんでしまった。

「だって、パンを食べるのを拒否したからよ！代わりに、彼らを食べたんでしょ！」彼女は唸った。「エルジョ、彼らの魂を食べたのよ！」彼女は研ぎ澄まされた骨製の古い皮剥ぎナイフを取り出し、刃を彼の頬と唇にそっと滑らせた。「さあ、このテーブルの上に横になりなさい！」

彼女が両腕を大きく振り回してテーブルを片付けると、食べ物が散らばり、皿が足元の石畳にガタガタと音を立てた。かつては優雅で格式高かった貴族の宴は、今や汚れた床の上に、判別不能なほど醜悪な山と化していた。

一瞬のうちに、彼女は彼が最後に彼女の足を見た場所、つまりテーブルの外に立っていた。「さあ！テーブルの上に横になりなさい。私たちは彼らを蘇らせ、新たな命を与えてあげましょう！さあ、起きなさい！」

ラザロはテーブルの下で震えながら、彼女の長く黒い爪のついたつま先を見つめていた。

「起きなさい、ラザロ様！」

【第14章終了】



この文学作品は

d専ら献身的に

エドガー・アラン・ポー (1809年 - 1849年)

—彼の遺志が私たち一人ひとりの心の中で生き続けることを願います—



~[GothicNovel.Org](https://www.gothicnovel.org)~